

応用編のおわりに

本書編集期間中にちょうどソチオリンピックが開催された。オリンピックを見ているとスポーツが持つ「人を感動させる力」というものを強く感じる。

ソチオリンピックを見て何人が感動しただろうか？浅田選手の演技を見て感動した人はきっと何百万人もいるだろう。そのうちの数千人は人生を変えるほどの大きなインパクトを受けたと思う。

ソチオリンピックを見て何人が元気になっただろうか？葛西選手の活躍を見て、明日から頑張ろうと思ったサラリーマンは私だけではないはずだ。

エンジニアがどんなに頑張ってもこれほど短時間で、これほど多くの人の感動や活力を生み出すことはできない。それだけスポーツが持つ「人を感動させる力」は強いし、偉大なことをした選手達は素晴らしい。

こうした感動を東京オリンピックで、そしてぜひ走り高跳びという競技で実現してほしいと思う。残念ながら私がその当事者になることはできないが、こうした書物を作成することで、微力ながら若い選手の記録向上に役立てば作者冥利に尽きる。

本書の読者の多くは現役の若い高跳びで選手であり、これから自己ベストをどんどん更新していくことだろう。忘れないで欲しいのは読者諸君は今「人生の絶頂期にいる。青春の真っ只中にいる」ということだ。青春の真っ只中にいる君達のチャレンジはどれも等しく「輝いて」いる。そして、その輝きの持つエネルギーは他の多くの人の活力や生きる支えとなっている。

チャレンジに失敗はつきものだ。本書では多くの選手の「成功例」を中心に紹介しているが、失敗した取り組みもその背後に数多くある。

失敗したことの無い選手というのは何も新しいことをしていない選手のことだ。そして新しいことにチャレンジしない選手に記録の向上はない。高跳びは競技のルール上、失敗するまでチャレンジし続ける競技だ。不屈のチャレンジ精神を忘れずに競技生活を続けてほしい。

